

「生き残りへ 智略縦横 真田三代」(第三回)

講師 一龍斎貞花

大河ドラマでは幸村ならぬ信繁。本

当は信繁が正しく、昌幸が武田の配下となっていた時で、信玄の弟信繁の名をつけたのかも。信繁からいつ幸村に改名したか歴史書でも余り明らかではありません。講釈師玉田玉秀齋の書いた立川文庫で幸村の名が有名になり、幼名もあります。本稿では解りやすく、始めから幸村で書いておきますので、ご了承下さい。

天正十三年七月、上田城を攻め落さるんと、徳川軍七千余の軍勢にて出陣。八月二日の朝まだき、陣鐘太鼓の音高らかに進撃を開始。

上田防衛の最前線、神川の向う岸に六連銭の旗指物。

「地獄の渡し賃六文銭、餓鬼道、畜生道、修羅道であれ来世で六道のいずれ

に生れ変つても後悔せぬ」と幸隆が決

意を固めた六連銭の旗。ロクモン銭とよく言われますが、リクレン銭が正しいようです。昔は六をリクとも読みました。東京の庭園、柳沢吉保の六義園が有名です。

実際は幸隆以前から、海野一族の間で用いられていたと申しますが、真田の生き方が、地獄の覚悟からといわれるようになったのでありましょう。

「あれは何者の手勢じや」
「二男幸村の手勢二百ばかり」
「二男は上杉へ人質に行ったはずだが、マアよいは、たかが小童」

大鍬形の前立打ったる兜を頂いた大久保忠世が

「神川を押し渡り、一気にけ散らせ！」
用意の丸太を渡し喊声を上げてどつ

とばかりに突き進む、幸村の一隊押し

まくられ一散に逃げ出す。
「手応えのない奴、押せ押せ」
三重櫓から眺めていた昌幸、ニヤリと笑い、「これでよしよし」
徳川勢、三の丸の大口へ。

「門がまだ完成しておらんぞ、それっ」
これは敵を誘いこむため。
三の丸に入ると、表通りの軒を並べた町屋、戦火を恐れて商人たちは家財を持って山の中に逃げ込み空家。

城下の道は、鉤の手のように入り組み、しかも道の左右には互い違いに設けた千鳥掛けの柵が突き出している。突進してくる敵の勢いをそぐための仕掛け。

「くそっ、邪魔なことを。それっ二の丸の門を打ち破れ」

徳川勢が二の丸の門外にひしめいて

いるのを見て、

「幸村、二の丸へ行け、矢を射かけよ、石を落とせ」
「かしこまつて候」と、幸村飛ぶが如く二の丸門の櫓に上り、キリキリッと引きしぼった弓、ヒョーウと放てば

狙いはあやまず敵兵にプツと突き立った。これを合図に幸村配下の猿飛以下喊声を上げながら石つぶて。なにしろ忍び者の石つぶて、威力がある。一七〇キロ以上だ。

丸太で門を破ろうとしていた徳川勢、石つぶてをさげようと両手で頭をおおう。

「綱を切れっ」 斧を振り上げ気合諸共太い綱を叩く切。櫓の屋根根におかれた巨大な竹箆が崩れて、つめこまれた大石、木の切り株が、ガラガラッ

これに当ってその場に打ち倒れる者、

逃げようとする者、狭い通路に大人数がひしめき右往左往する敵へ

「鉄砲隊、撃てーっ」

狭間（はざま）からダダ……、徳川勢大混乱。

敵の勢い盛んなる時は、真正面からの戦いを避け、敵の勢い衰えた瞬間にすかさず攻める孫子の兵法。

出撃合図の太鼓ドーンと打ち出せば、城門押し開かれ赤備えの兵がドツとばかりに押し出していく。

混乱しているところへ攻め掛かられたから、一方的に押しまくられずる後退をする。

幸村の二百に続いて、昌幸の本隊八百、それと大手門から打つて出る。

「押せ、押せっ」

流れが自軍にある時は、押しに押す。

だが、いかに混乱しているとはいえ大軍の徳川勢。

「ひるむな、敵は小勢ぞ押し返せ」

盛り返しはじめた。押し返される真田軍、ここぞと勢いを取り戻した徳川軍と、この時、城の北方に「ワーッ」と上る大喊声。

六連銭の旗なびかせ、うんかの如く

押し寄せるその数二千。実はこれ、なんと真田領一帯の農民、商人たち、紙で作った六連銭の旗を押し立て喊声を上げて押し出したから見誤るのも無理ありません。

外交、軍事面では策略家ですが、昌幸は領民に対し思いやりのある政を行い、年貢も他より安くしていた。

「戦いでは策略を用い、非情な決断もする。領民に対しては、交わした約束は律義をもってこれを守り、情けをかけて味方につけること」

この昌幸の恩義に感じ

「殿様の大事とあれば、我等喜んでお味方致します」と名主の申し出。

冷たい仕打ちをしていれば領主が代わってほしい。攻めてきた者に土地案内をしたり通報したりするが、善政の殿様ならば、領民も味方してくれるのです。

社員、取引先を大事にすることこそ名経営者の条件。

「すわつ伏勢ぞ、真田は二千の兵と聞いていたが、なんとしたことだ、このままでは、我等は敵に囲まれ全滅じゃ、引け引けっ」

徳川勢が退却をはじめると、真田勢ここぞと追いかける。

こうなつてはたまらない、我先に逃げんとしたが、随所に設けられた千鳥掛けの柵にさえぎられ、大勢が一斉に逃げられず押し合いへし合いで、かえつて狭い道がふさがりままならない。ここぞと佐助たちが、町屋に火をつけたから炎と煙に巻かれて大混乱。

「落ち着け、落ち着け」

城下を脱出してようやく国分寺近くまで来た時、砥石城から出撃してきた信幸の一隊が側面から襲いかかる。更に毘の字の旗押し立てた上杉勢二千。

徳川勢ようやく神川まで来てみれば、たやすく渡ることが出来た川が、にわかにかき増し、だく流渦巻きゴオーと流れてくる。昌幸は神川の上流に堰を作つて流れをせき止め、上田城内から上った狼火を合図に一気に堰を切つたための大水。人馬諸共激流に押し流され溺れ死。

昌幸、信幸、幸村親子も、刀・槍を振るつて敵を追いつめ、この合戦による徳川の死者千三百余人、真田方三百。真田の大勝利。ここに小よく大を制し、

天下に真田の力をしめたのでございます。幸村は人質として上杉へ戻り、改めて兼続と交りを深くしていったのでございます。

徳川軍を完膚なきまでに叩いた昌幸は、上杉と毛利が豊臣の臣下となつたと聞かや、

「小牧・長久手で家康に負けた秀吉が、徳川を倒した我等を欲しがるとは当然、今こそ真田の売り時ぞ、幸村大坂へ行け、秀吉公が喜んでくれるぞ」

「エッ」

流石の幸村も顔色を失った。

上杉が、豊臣の元へ出発した留守に人質が勝手に越後を抜け出し大坂へ。

景勝はカンカンに怒つたが、徳川をやつつけた真田、利用価値ありと秀吉。「そう怒るな、豊臣家に忠節を尽くそうという仲間、わしの顔を立てると思つて許してやつてくれ」

しかも秀吉は、真田を独立した大名にと取り立ててくれ、豊臣の恩義を感じる幸村。

いよいよ佳境に入って参ります真田三代、次回お楽しみに。